大正十五年二月廿三日第三種郵便物認可　大正十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）

黑崎幸吉主幹

三月號（一九二六年）目次

發刊の辭……一
雜感錄……三
贖罪（教理か事實か）ヒレモン書の研究……四
教會論（一）精論「首と體」……一二
ジョン・カルビン小傳（一）ルーテルとカルビン……一八
山上の垂訓の研究 馬太傳五の一―三……二三
傳道欄――信者と未信者との差異……二七

永遠の生命

第一號

永遠の生命

第一號

發刊の辭

私が本誌を創むる事を躊躇した原因は澤山にありました。其一は既に基督諸教會又は個人の基督信徒によりて發行せらるゝ此種の小雜誌の數が百五十以上に上つて居る事であります。極めて少數の微力な日本の基督教界に於てかゝる多數の雜誌がある事は決して喜ぶ可き事ではありません。然るに自分が更にそれに一を附加すると云ふ事は、如何に考へても躊躇せざるを得なかつた次第であります。其二は私の現在の居所が北國の一隅であり所謂中央から遠ざかつて居るが爲めに、かゝる仕事をする事が果して適當であるかどうかと云ふ点であります。信仰の問題を論するのに必ずしも中央に居なければならぬ事は無い樣なものゝ、人の注意を集め得ないならば、結局此の企ても水泡に歸するより外に無い譯であります。之れも此の企てを躊躇せしめた理由であります。其三は經濟上の問題であります。數種の優れた基督教雜誌を除いては、此の種のものは皆信者又は教會又は其他よりの援助の下に其の生存を維持して居ると云ふ事であります。然るに私に取つてはかゝる援助は有りません、私には私の信者もなく、私の教會もありません、さらばと云つて此の雜誌のために金錢を永久に出費する餘裕もありません、是れ私が躊躇せざるを得ざりし一の理由であります。其の四は此の雜誌の性質であります。社會問題や、勞働問題や、戀愛問題を論ずる雜誌ならば、現今は多くの人を引きつけることが出來ませう、然るに基督教は今日最も流行らない問題であることを私は知つて居ります。かゝる流行らない題目を捕へ來つて、一の雜誌を發行すると云ふ事は、隨分亂暴な事の樣にも思はれたのであります。其の五は自分自身の價値であります。若し私が偉い人間であつて、多くの人を來きつける樣な人格とか、

技量とか、文章とか、雄辯とかを持つて居ると云ふ自信があるならば、かかる企を爲す事も左程に躊躇する理由はありません、かゝる人こそ所謂成功すべき素質を持つて居る人であります。乍併私は是等のどの一をも持つて居ない事を知つて居ります。夫故に友人の中に雜誌の刊行をすゝめてくれる人も多くありましたけれども、今日迄躊躇し來つた所以であります。

現在私の故郷にあつて、勉學と傳道とに從つて居る私の希望は主として福音の証となる樣な著述をなし、殊に聖書の註解を書き度いと云ふ事でありました。而して此希望を今でも持つて居ります。唯此の靜かな生活を送つて居る中に私の心に泉の如くに湧き來つてとゞめ得ないものは、救はれし者の歡喜、主イエスと倶に在るの幸福、日々の祈に於て與へらるる力であります。かゝる歡喜、かゝる幸福、かゝる力を自分一人で之を專らにする事は到底出來ません。一人でも多くの人に此のよろこびを分ち、共に主イエス、キリストの無限の愛を味ひ度いと云ふ心が如何にしても之を壓へる事

（二）

が出來ないのであります。そしてかゝる日々の恩惠を頒たんとせば長日月を要する大著述を以て之を爲す事は出來ません、唯其の恩惠の上より降るがまゝに、直に之を筆をもて記して、共に主を仰がんとする友に之を頒つより外に道が無い事を知つたのであります。是れ以上に述べし多くの理由が皆私をして躊躇せしめたにも關はらず、遂に之を斷行するに至つた所以であります。

夫故に私が本誌を通して讀者に頒たんとするものは私の價値でも學問でも信仰でもありません。唯救はれし者の歡喜の生活とキリストの無限の愛とを、そのまゝに記さうとするより外無いのであります。「われ福音を宣傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり、もし福音を宣傳へずば、我は禍害なるかな」（コリント前書九の十六）是が本誌を發行するに至れる理由の最もよき說明であります。

※　※　※

雜感錄

○西洋の文明を輸入する事と、基督教を日本に傳へる事とは二つの別事である。勿論西洋の文明は基督教の大なる影響を受けたに相異ない。乍併物の實體を輸入せずして、その影響を輸入する事は出來ない。基督教の本體を輸入しさへすれば、それが相應なる影響を、日本の文明に與へるのである。影響を本體から離して輸入する事は愚な事である。

○歐洲殊に獨逸に於て、近來漸に歐洲文明夫自身につき疑問を挿み始めた。そしてそれが基督教と別事であつた事に氣が付き出した事は、慶賀すべき事である。英米の宣教師も五十年前に此の事に氣がついたならば、日本の傳道は今日の如き失敗に終らなかつたであらう。

○日本の官憲が、キリスト教の功績を認めざるを得ざるに至つた事をきいて、しきりに悅んで居る牧師がある。乍併官憲がキリスト教をほめるのは政治上の功罪によるのであつて、神の御旨に叶ふや否やは問題の中に入つて居ない。基督者の常に求むべきものは神の御旨に叶ふ事である。それが或は偶然政治家の賞讃を得る事もあるべく、又或は其反對に逢ふ事もあらう。此の毀譽によりて喜憂するは、全く立脚地を踏み違えたのであつて、基督者の恥辱である。基督者は其の心よりかゝる考へを除去しなければならぬ。

○自己について全然絶望せる經驗を有する者は、眞にキリストに於て完全なる希望を持つに至るのである。キリストの十字架の救拯は、唯自己に絶望せる者に取りてのみ眞理である。自己の中の何物かに尙希望を繫ぎ得る間は、人は救を要求しない、從つて十字架は彼に取りて空しきものである。

○人は種々の性質を以て生れて來る。而して豹の其の斑点を變へ得ざるが如く、人の本來の性質は變らない。唯信仰によりて此の性質を支配する主が更るのみである。前には罪が主であつた。今はキリスト我らの主に在し給ふ。

贖罪（教理か事實か）

（ピレモン書の研究）

世に最も不快なる事柄は、贖罪を一の教理として之を受け納れ、一の幾何學の方程式を記憶するが如くにして、之を記憶して以て得たりとなしつゝある事である。殊に之を振り翳し、意氣揚々として自己の安心を誇ること恰も叡山の僧徒が、其神輿を擔ぐが如くするのを見る時、我等は之に對して反抗の心に燃えざるを得ない、彼等は贖罪に關する自己の知識が、自己を救ふかの如くに考ふる大なる冒瀆を敢てして居るのである。乍併恰も其正反對に、他の一種の基督が存在して居る。彼等は、贖罪の眞理については何事も知らない。贖罪は古き教義、パウロの神學なりとして之を拋棄し去つて顧みず、唯キリストの十字架上に示されし其の愛のみによつて、完全なる救を經驗せんとして居るのである。かゝる人々は其の心は愛すべく、其の態度は眞面目であるけれども、而も基督の救の此の中心的眞理を顧みざるの結果、其の心に平安が無く、其の信仰に力が無く、大歡喜を以て躍り上る事が出來ず、大確信を以て凡てのサタンの迷はしを打ち拂ふ事が出來ない。救はれざるが如く、救はれたるが如く、基督者なるが如く、又ならざるが如く、常に不確かの中に彷徨して居るのが其の實狀である。キリストの十字架による贖罪は、果してかゝるものであろうか、若し贖罪がかく唾棄すべきもの又はかく無力のものであるならば、我等も亦之を顧みないであろう。

乍併以上は基督教の福音に對する二つの誤れる方向を示して居るのである。其の第一の誤謬は、靈の問題、信仰の問題たるべき事柄を、肉の問題、知識の問題として取扱ふことより生ずる過誤である。所謂單純なる信者又は頑固なる信者と稱せらるゝ者の中に、此の種の信仰の弊害に陷つて居る者が多い。彼等は聖書は神の言なりと信ずる。而も之を心の事とせずして、頑の事又は常識の事となし、靈の事となさずして肉の事として信じて居

るのである。即ち彼等は器械的に之を認受(アクセプト)して居るに過ぎない。夫故に聖書に贖罪につき記されて居るのを見て、直に之を取つて以て自己の信條となして之を誇り、之を知らざる者又は之を確信し得ざる者を憐むのである。夫故にかゝる信仰(?)の中には、神らしき光を見る事が出來ず、盡きざる生命を認める事が出來ない。何人もかゝる人々を見て感ずる直感は、「是が果して本物なりや」との疑問である。而して此の疑問は正當なる疑問であつて、誤れる出發点より出づる此の觀念は、重大なる誤を持つて居るのである。

かゝる種類の基督教（十六世紀の宗教改革の熱情が冷却し始めし時、かゝる種類の信仰的墮落を多く目擊する事が出來た、今日も此種の基督者がある）に對する反動として、第二の過誤が發生した。即ち一方此種の信仰に對する反感と、他方に十七八世紀に起れる個人の自由思想の影響を受けて、單純なる信仰を輕視して却て個人の尊嚴を主張し、又學藝科學の進歩も之に加はりて、個人の罪の意識が次第に弱くなつて行き、遂には贖罪の教義を否定し、之を以て單にパウロの發明せる教義の一種となし、キリストの教とは關係なきものとして、之を否定せんとして居るのである。其結果基督教は其の中心を失ひ、一種の道德教と化し社會教と化しつゝあるのが今日の實狀である。

「乍併贖罪の眞理はかゝる死せる教義にもあらず又無用の事柄でも無い。實にキリストの福音の中心的事實である。「キリスト聖書に應じて、我等の罪のために死に」給へる事（コリント前書十五の三）は、パウロが受け又傳へし福音の中心眞理であつた。「凡ての人罪を犯したれば、神の榮光を受くるに足らず、功なくして神の恩惠により、キリスト、イエスにある贖罪によりて義とせらるゝなり。即ち神は忍耐をもて過ぎ來しかたの罪を見逃し給ひしが、己の義を顯はさんとてキリストを立て、其血によりて信仰によれる宥(なだめ)の供物となし給へり。」（ロマ書三の二三—二五）とはパウロの信仰の中心であつた。若しキリスト十字架に懸りて我等の罪を贖ひ給はざりしならば、我等の過ぎ來しかたの罪は、今も尙神の前に罪として殘るので

あつて、我等到底彼の前に立つ事が出來ない、神の怒は我等の過ぎ來しかたの凡ての罪の上に下る可きである。然るにキリストは其大なる愛をもて我等を愛し、我等の罪を赦さんが爲めに自ら我等の罪を負ひ、我等のために十字架にかゝりて宥の供物となり給ひて、今や神の怒は我等の罪の上に降らず、十字架上のキリストの上に降つて神の義を全うし、我等をも義とし給ふたのである。是れ決して空しき教義ではない、又之れ無くして我等に救は有り得ない、實に最も重要なる事實であり又眞理である。

而して我等此の贖罪の眞理の最も適當なる說明をピレモン書に於て見出すのである。

ピレモン書は聖書中に於ける最も特異なるパウロの書翰である。即ち純然たる一私事の爲めに認められし書翰であつて、此の点に於て聖書中他に其の例を見ない。一個人に宛てられたる福音書はルカ傳である(一の四)。乍併其の內容は純然たるキリストの福音であつて、對個人的色彩は全然

(六)

無い。使徒行傳も全じくルカがテオピロに宛てゝ綴れるものであるけれども、是も全然一般的書翰である。ヨハネ第二書第三書も個人に宛てられて居るけれども、其の教訓は一般的性質を有して居り、私事に關係を有して居ない。パウロが其愛する弟子に與へしテモテ前後書及テトス書と雖も、其の中に諄々として說く處の事柄は、信仰の問題教會の問題、修養の問題等であつて私事ではない。テモテ後書四章十三節に於て、パウロが其の外套と書物とを携へ來らん事を求め、又テモテ前書五章二十三節に胃のために少量の葡萄酒の飲用をテモテに薦むるが如きは、全聖書中に例外的に挿入せられし私事である。其他に於ては私事に亘れる事はたとひ個人に與へし書翰と雖も、之を含んで居ないのである。

然るに不思議な事にはピレモン書は、全書翰が一の私的の問題を取扱つて居る。紀元六十年頃パウロは捕はれてローマに在つた。(使徒行傳廿八の十四)其の間に所謂獄中書翰(エペソ書、ピリピ書、コロサイ書及ピレモン書)を認めたのである。

此中に於てコロサイ書とエペソ書とは同時に認められ、同時に送られたものらしく、其の書翰の持參人は皆パウロの「愛する兄弟、忠實なる役者、主にありて我とともに僕たるテキコ」(コロサイ書四の七及エペソ書六の二十一)であつた。そしてピレモン書も同時にピレモンに宛てゝ認められ、嘗てピレモンの奴隷たりしオネシモは、テキコに伴はれて此の書翰をピレモンに持參したらしいのである(コロサイ書四の九)。

ピレモンはコロサイの人で(コロサイ書四の十七及九ピレモン書二參照)、恐らくパウロによりてキリストを信ずるに至れる人であらう(十九節參照以下書名を掲げざるはピレモン書なり)。其の家の集會を持つて居り(二節)、優れたクリスチヤンであつた(五、七節)。彼の僕にオネシモなる者があつた。彼はピレモンに取つて「益なき」僕(十一節)であつた。恐らく主人の金錢を私消した事も、其の罪の一つであつたのであらう(十八節)。此の事及其他の不義のために、彼はピレモンより逐はれた。オネシモはピレモンの家にある間、既にパウロのキリストにある愛について知つて居つたのであらう。彼はピレモンより逐はれて、パウロの許に逃れたのである。パウロは彼を容れ其の口々に於て、繃帶の中にある間に彼をキリストに導き、其罪を悔ひ改めて新に生まれしめたのである(十節)。故にオネシモはパウロに取りて信仰の子であり、キリストに在る愛子であつた。今パウロは此オネシモをピレモンに返し、ピレモンをして彼を受け納れしめんとして此書翰を認めたのである。

見よ、如何にパウロが彼を愛する事の切なるかを。彼はパウロに取りて「繃帶の中に生みし我が子」(十節)であつた。パウロは彼を「我が心なり」(十二節)とも云ひ又「我は殊に彼を愛す」(十六節)と云つて居る。パウロは彼を離すに忍びなかつたのであろう。「我は彼を我が許に留めおきて、我が福音のために繃帶にある間、なんぢに代りて我に事へしめんと欲した」(十三節)事を書翰に認めて居る。故にパウロ一個の希望としてはオネシモを自己の傍に置きて、日常の雜務に從事せしむる事であつたろう。乍併ピレモンとの間に罪の問題が

解決して居ない事を知つて居るパウロは、之を其儘に放置する事が出來なかつた。夫故に一方ピレモンを勸めて、オネシモを受納れしめんと努力し「オネシモが暫時ピレモンを離れしは、或は却て永遠に彼を保ち、もはや奴隷の如くせず奴隷に勝りて愛する兄弟の如くせん爲なりしやも知る可らざる事」を敎へて、暗にオネシモを扱ふに基督敎的態度を以てすべき事を示し（十五、十六節）斯くして從來ピレモンとオネシモとの間に結んで解けざりし罪故の分離の問題を解決せんとしたのである。

而して我等玆に注意しなければならない事は、パウロのオネシモに對する愛が、パウロをして如何なる態度に出でしめたかと云ふ点である。即ちパウロは其の愛の故に全くオネシモを自己と全一視し、自己を受くる心を以てオネシモを受け納れん事をピレモンに勸めて、「汝もし我を友とせば請ふわれを納るゝごとく彼を納れよ」（十七節）と云つて居る。若しピレモンが眞實にパウロを愛し、而してパウロが其の愛をもてオネシモを己に返さんと執成しつゝあるを知るならば、如何にして此のパウロの執成しを拒む事が出來ようか、誠實と誠實、愛と愛との相合ふ處に其處に完全なる靈の一致がある、何物も此の一致を破壞する事が出來ない、たとひ最大の罪すらも此の一致を妨げる事が出來ないのである。

パウロは單に自己の愛を示して之を執成したのみでは無い。又自ら進んでオネシモがピレモンに對して負へる凡ての負債を自ら負はん事を申出たのである。「彼もし汝に不義をなし、または汝に負債あらば之を我に負はせよ、我パウロ手づから之を記す、われ償はん」（十八、十九節）と。是れ實にパウロの愛の極致では無いか。パウロはオネシモが何物かをピレモンに對して負ふて居る事を知つて居つた。而してピレモンが其の返濟をオネシモに迫る樣な事のない事は、パウロにも明かであつたろうと思はれるけれども、然もオネシモに對するパウロの愛は是を其まゝに放置するに及びなかつた。オネシモの良心は其の負債の全部を償却する迄はピレモンの前に安らかなるを得ない事をパウロは知つて居つたのである。且つオネシモが

其の今後の勤勞を以てしても、其の凡ての負債を償却するの力が無い事をパウロは知つて居つた。夫故にパウロはオネシモの負債を凡て自己の上に引受けてピレモンに支拂ひ、以てオネシモがピレモンに對する良心の平安を得しめんとしたのである。何たる大なる愛であるか。愛の結果は實際茲迄至るべきである。茲に至らざる愛は未だ足らざる愛である。パウロの愛は自己の功を凡てオネシモに歸し、オネシモの罪を凡て自己の上に歸したのである。

我等茲にキリストの贖罪の事實が此三人の偶然なる家庭的事情によりて、明かに示されて居るのを見るでは無いか、我等は神の前に「益なき者」である、神に對して「不義をなし」「負債を負ひて」彼の前より逐ひ出されし奴隷である。我が罪は緋よりも赤く我が負債は神の前に堆高く積つて居る。我等顏を上げて神を見る事が出來ず、自己の努力によりて此の負債を返濟する事が出來ない、且つ尙日々に負債が增し行くのみである。我進退谷まつてキリストに寄り縋つた。我等の罪を凡て彼の前に告白して彼の愛の懷に入つた。恰もオネシモがパウロの處に逃れしが如くである。然るに視よキリストは我を新に生み給ひて神の子となし給ひ（十節）（ヨハネ傳一の十三）我を奴隷とせずして友と呼び（ヨハネ傳十五の十五）又キリストの兄弟となし給ふた（ロマ書八の二九）。而して我等の罪を凡て其の上に負ひ給ひて我等のために十字架上に死に給ふたのである。「まことに彼はわれらの病患をおひ我らの悲を擔へり……彼は我等の愆のために傷けられ、我等の不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたう、そのうたれし痍によりて我らは癒されたり」（イザヤ書五三の四五）。恰もパウロがオネシモの負債も不義も皆之を已に引き受けて彼をピレモンに執成しせる如く、キリストは我等の凡ての罪を已に引き受けて神の前に宥の供物となり給ひ、之によりて我等罪人は神の前に全く罪無きものとして受け入れらるるに至つたのである。

而のみならずパウロは又自己の故にオネシモを受け納れん事をピレモンに乞ふた。是と同じく我

等も亦神の前に立つ時イエスの義の衣を纏ふて立つのである。神の愛子に在し給ふイエスが、其の生命をすてゝ我等の罪の赦を神に乞ひ給ふ時、愛の神は之を容れ給はない理由はない。何となればイエス、キリストは、彼の聖と義と贖と智慧とを、我等のものとし給ふたからである。故に我らは最早や罪を犯せるものとして神の前に立たない、キリストを通して神の前に出て、神はキリストを通して我等を見給ふのである。而してキリストは我等の爲めに神の前に執成し給ふのである。「人もし罪を犯さば我らのために父の前に助主あり、即ち義なるイエス、キリストなり」(ヨハネ第一書二の一)義なる神の子キリスト我等を愛して我等の爲めに神の前に執成し給ひ、「請ふ我を納るゝごとく彼を納れよ」(十七節)と云ひ給ふ時、神は必ず之を請け納れ給ふであろう。是がキリスト、イエスによる罪の贖である。

ピレモン書に現はれしパウロとオネシモとの關係が、實によくキリストと我等との贖罪の關係に類似して居る事は不思議な程である。而してパウロは他の書翰に於ては屢々キリストの贖ひについて論じ又記したが爲めに、恰も贖罪論はパウロの主唱によりて起れる一の理論なるが如き觀念を人に與へて居つたけれども、實際は是れ神の愛より出づる事實であつた事を、パウロは無意識にピレモン書に於て示して居るのである。

パウロがピレモン書を認めた時は、キリストの贖罪について論ぜんとする心は毫頭無かつたのは勿論、其間接の証をしようとする心すらも無かつた。唯自已の愛するオネシモを如何にもして、ピレモンと和らがしめんが爲めに、其全力を盡したに過ぎなかつたのである。其時パウロは一の理論も神學も教義も念頭に浮ぶ事無しに、極めて自然にオネシモの凡ての負債を自已に引受け、自已の功勳を以てピレモンをしてオネシモを受け納れしめんとしたのである。若し眞にパウロがオネシモを愛して居るならば——而して實際彼はオネシモを愛して居つた——此方法に出るより外はなかつたのである。パウロはピレモンに向ひ或は道德的立場より、或は社會的立場より、或は常識的立場

よりオネシモを受け納る可き事を論ずる事が出來たかも知れぬ。是れ普通の宗教家や道德家の取る態度である。乍併かいる態度はオネシモに對して全く愛を有せざる時に於ても、之を爲す事が出來る。否愛がキリストの愛迄に至らざる時は皆此態度に出るのである。然るにパウロは茲に止まる事が出來なかつた。彼は進んで自らオネシモの罪を負ひオネシモを援けんとしたのである。キリストが人類を救はんが爲めに取り給へる態度は正に是であつた。

若しキリストが人類を愛する事釋迦や孔子の程度に止まる事が出來たならば彼は或は罪よりの解脫を說法し、道德を修養する事を人々に敎へて安穩の中に其の終を全ふしたかも知れぬ。乍併彼の愛はあまりに深かつたが爲めに茲に止まる事が出來なかつた。彼は自ら我らの罪愆を負ひて十字架の上に釘けられ給ふたのである。愛の極致は茲まで達せずに止む事が出來ない。他人の罪を自已の罪の如くに感じ、他の苦痛を自已の苦痛の如くに思ひ、自已に敵するものをすら救はんとするの處に愛の眞の深さがある。其處に贖罪の根本の原理があるのである。

パウロを以て單に一の神學者となし贖罪と云ふ如き困難なる敎義を發明せる者となす者は誰であるか。パウロは決してかゝる閑人では無かつた。彼は愛の何物たるかを知つて之を實行した。而してキリストの死に於て此の愛の完全なる表顯を見キリストがその十字架の上に人類の凡ての罪を負ひ給へるを知つたのである。彼は此の事實を目擊して之を贖罪と稱したのであつた。決して舊約時代の祭事を牽强附合したのでも無く又强て無理なる說明法を發明したのでも無い、唯事實を有りのままに述べたに過ぎなかつたのである。而してピレモン書に於てパウロがかゝる愛の實行者なる事を見て我等はいよ〳〵贖罪の事實の神の當然取り給ふべき愛の犧牲なる事を疑ふ事が出來ない。我等は唯是が神の愛の發現である事を知り、かゝる愛を以て我等を愛し給ふ神の御前に我等の罪を悔改めて其の赦しに與かる可きである。幸福なるかなキリストの贖によりて罪の赦を得たる者。

教會論（一）

一、眞の教會

「教會」なる語の中に今日如何に多くの内容を包含せしめつゝあるかは驚くべきものがある。其の教義の点より云ふも舊教と新教の如く互に相容れざる内容を有し互に敵視するものがあり、又新教中にも數多の種類の信仰の内容に分れて居り何處に歸す可きかを知らざるが如き有樣である。即ち英國聖公會の如く舊教に近き信仰の内容を有するものもあれば又他の極端のクエーカー派の如き神秘的經驗を内容とするもあり、或はキリストの再臨を主として强調するもの、或は聖潔を救拯の必要條件とするもの、或は神癒を以て主なる内容とするもの、曰く何、曰く何、殆んど數ふるに遑あらざる程多數の主義主張がある。而して是等の凡てが「教會」なる名稱の下に、包含せられて居るのである。

又其の儀式禮典に於ても非常なる相異を認められるのである。或は舊教や聖公會の如く、殆んど日本の寺院の儀式の如き禮拜を行ふものもあり、一方クエーカー派の如く全然儀式を行はず、洗禮晩餐をすら行はず、其の日曜の禮拜の如きも牧師無く司會者無く唯だ聖靈の導くがまゝに或は語り或は歌ひ、時には全く語る者もなく沈默の中に禮拜を終るが如きものもある。此の兩極端の間に種々雜多の程度に於て異る禮拜の形式を取つて居るものがある事は勿論である。而して是等も皆「教會」の名稱の中に包含せらるるのである。

教會政治に於ても全樣に種々の差別ある事は周知の事實であつて、茲に之を一々擧くるを要しない。要するに非常に異つた内容を有するものが此の「教會」なる名稱の下に包含せられて居るのである。而して其の中には舊教と新教の如く、互に自已を以て正しき信仰なりとし他を異端邪說として互に相容れざるものもあり、又かく極端なる反對に立たない迄も、互に自已を以て他に優れりとして自已の教會の存在を意義あらしめんとして居る者もある。我等此間に立ちて果して何れが眞の教

會であるかを知る事は非常に必要なる事であると云はなければならぬ。然らざれば我等は五里霧中に彷徨するより外に無い、我等眞の教會の如何を知らざれば現在の教會なるものゝ眞僞を知る事が出來ず、又其の誤を正す事が出來ない。殊に今日の日本の如く、皆外國の教會を輸入し模倣して居る處に於ては、かゝる狀態より速に脫却する事は絕對の必要であつて、是が爲めには眞の教會の如何なるものなるかを知る事が第一の必要である。

ロ、聖書に表はれたる教會の本質

我等先づ教會の本質を知らんが爲めには聖書に依らなければならぬ。聖書は神の靈感によつて記されたるものなるのみならず、教會に關する最も古き觀念及び古代教會の有樣が此の中に示されてあるのであつて、此の根本的觀念が歷史の發展と共に種々に變化し、或は進步し或は墮落して今日の狀態に立至つて居るのである。夫故に我等は先づ聖書によつて教會の本質を研究しなければならぬ。

(一) 新約聖書に教會の原語エクレシヤが教會以外の意味に用ゐられた個所が二ヶ處ある。一はイスラエル人の集會を意味し(使徒行傳七の三八)一は異邦人の會衆を意味して居る(全十九の三二、四一)。而して其他の場合に於ては皆クリスチヤンの集會即ち教會の意味に用ゐられて居る。元來エクレシヤなる希臘語はギリシヤ市民全體が公共の問題を決議せんが爲めに招集されし場合の集會を意味して居る語であつた。此の集會の性質が神より召されし聖徒の集會に似て居り從て其の名稱が相應はしき名稱として、キリストの教會を指すに用ゐる樣になつたのである。乍併勿論此の語は建物を指すのでも無く、又制度を指すのでも無かつた事は、各地に「何某の家にある教會」(ロマ書十六の五、コリント前書十六の十九、コロサイ書四の十五、ピレモン書二)なる小集會があつた事を見ても明かである。かゝるものを總稱してエクレシヤと云つたのである。

而して聖書には教會に對して別段何等の定義を與へて居ない。唯各所に種々の譬喩的用語を以て其の性質を間接に表明して居るに過ぎない。乍併是等の譬喩は却て乾燥無味なる定義に比して遙に適切に教會の性質を示すのであつて、之によりキリスト並に使徒等が教會に關し如何なる觀念を持つて居つたかを窺ふ事が出來るのみならず、彼等の思想が今日の一般の基督者の思想と如何に異るかをも知る事が出來るのである。先づ

(二) 馬太傳第十六章十三節以下を見るならば我等キリストが如何なる信仰の上に教會を立てんとし給へるかを見る事が出來る。

イエス、ピリポ、カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は人の子を誰と言ふか」彼等いふ「或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人」。彼等に言ひたまふ「なんぢらは我を誰といふか」シモンペテロ答へて言ふ「なんぢはキリスト活ける神の子なり」。イエス答へて言ひ給ふ、「バルヨナシモン、汝は幸福なり汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり、我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會(エクレシヤ)を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし、われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛る所は天にても縛り、地にて解く所は天にても解くなり」(マタイ傳十六の十三、十九)

(一四)

即ちイエスはペテロの告白せる如くキリスト生ける神の子であつた。此の信仰は決して人間の智識より來らず、科學の研究より之を得る事が出來ず、哲學的思索より得る事も出來ない、唯天の父が啓示し給ふ時のみ此の信仰に達する事が出來るのである。而して此の信仰は人類の歴史の一轉機であつて神の子が人類の中に宿り給ふとき其處に人類の救は成就し、其處に新なる神の民が生れるのである。夫故に教會は此の信仰を基礎とすべきであつて、此の基礎にあらざる他の基礎の上に建てられし教會はキリストの教會では無い。キリストを單に偉人の一人と考ふる思想の上に教會は成立せず、キリストを宗教の創始者とのみ考ふる立場の上にはキリストの教會は存在しない。彼は實に神の獨子に在し給ふ、彼はエリヤでもエレミヤでも無い、古今に唯一度生れ給へる活ける神の子に在し給ふ、我等彼を見彼を信ずる時、我等の生命は一變したのであつて、新に生れたのである。

此の新生を經驗せる者が、此の信仰の上に教會を建てるのである。而して主イエスは此の事を示さんが爲めに此の信仰を告白せるペテロを以てキリストの教會の基礎たる磐であると宣告し給ひ、彼に天國の鍵を與へ給ふたのである。是れ教會の立つべき基礎を示す最も重要なる節である。(註)

(註)カトリック教會は此の節を引用して自己の教會の正統なる事を主張する。其理由はペテロが與へられし鍵を代々の法王が傳へて居ると云ふのである。乍併キリストは之をペテロにのみ與へ給ふたのである。かゝる重大なる天職は特別の人のみに與へらるるのであつて之を相續繼承すべきでは無い、恰も十二使徒に相續者なきと全一である。大なる建物の基礎は一度之を置くを以て足る、基礎を次第に積み重ねる事は無意味である(ハイム教授近著「新教の本質」は此点につきよき暗示を與へて居る)

(三) 又聖書の各處に、キリストは教會の首であり教會は其體である事が記されて居る。(コロサイ書一の十八、廿四、エペソ書一の廿二、廿三、四の十二、十五、五の廿三、ロマ書十二の五、コリント前書六の十五、十二の二七等)。此の譬は極めてよく教會の本質を示して居る。即ち人體に於ては首と體とは密接なる有機的結合をなして居り、神經系統も血管も互に相通じて離れる事が出來ない。四肢はかゝる首の命ずるがまゝに動き、完全に其の服從を全ふして居り、而も一方四肢無くして首は其の存在を全ふする事が出來ない、是が人體の實際である。而して此の事實がキリストと教會との關係であると云ふのである。即ち教會はキリストと一の生命であり、一の有機體をなし血管や神經系統と一にし、四肢たる教會はキリストの命ずるがまゝに動き、キリストの命にあらざれば動かない、而してキリストと共に生くるにあらざれば生くる事が出來ない、教會とキリストは其の喜びを共にし、其の苦痛を共にし、完全なる一の生命をなして居るのである。

聖書に示されし此の教會の本質を、現在の所謂既成教會に比較して我等其處に大なる差異の存する事を認めざるを得ない。現在の所謂教會なるものは、其の全体としてはキリストに連る事によつて成立するにあらずして制度禮典に連る事によつ

て成立して居る。彼等はキリストの命に從つて動かすして自己の念に從つて動いて居る。彼等はキリストとの靈の交りを持たずして自己の思想や社會の風潮との交りを持つに過ぎない。實に此点に於て首と體との關係は全然之を認むる事が出來ないのである。故に今日成立して居る所謂教會なるものは眞のエクレシヤではない。唯其の教會の内外にありて眞にキリストに連りて一生命をなせる聖徒の一團があり、此の想像上の一團が眞の教會である事を知るのである。教會は修養團体でも無く、儀式を行ふ場所でも無い、實にキリストの體であつて彼と一の生命たる狀態に在るものの全体である。

此故にキリスト、イエスに在るもの(ロマ書八の一)即ち彼によりて新に生れたるもの(ヨハネ傳三の五等)換言すれば自己の罪を悔改めてイエスの十字架の贖罪によりて罪の赦を得たものは、此の新生命を有して當然にキリストに連つて居るのである。否連らざるを得ないのである。故に彼はパウロスマを受くると受けざるとに關はらず彼の生命は既にキリストの生命と連つて居るのであつて何物も之を分つ事が出來ず、又之を罪する事が出來ない。「此故に今やキリスト、イエスにある者は罪に定めらるゝ事なし」(ロマ書八の一)罪に定められざる者は「羅馬教會に屬する者」でも無い「聖公會に屬する者」でも無い、又「無教會主義を唱ふる者」でも無い、實に「イエス、キリストに在る者」である。羅馬法王はかゝる者を異端と呼ぶかも知れぬ、教會はかゝる者を未信者として取り扱ふかも知れぬ。乍併かゝる者は其生命が既にイエスに連つて居るのであつて、其血管にはイエスの血が流れ其の神經はイエスの指揮に從つて動き、其の肉体はイエスの僕として働いて居るのである。而してかゝる者の全体が眞のエクレシヤである。

而して教會が此本質を有して居る事は、其各員相互の關係を示す上に於て最も明かなる說明を與へて居る。即ち眞のエクレシヤを形成する各員は皆キリストの靈を受けて居る者であり、從て皆靈の賜物を受けて居るのである。而して神は單調を忌み給ふ、人間の考ふる如き平等は神の好み給ふ

處では無い、故に神は各人に種々の異りたる靈の賜物を與へ給ひ、斯くしてキリストの體を完成し給ふのである。故に全身に耳目鼻口手足等を適當に配置し給へる神は、全教會にも亦靈の賜物を種々の形に於て賜はるのである。是寔に神の智慧に叶へる事であると云はなければならぬ。

故にエクレシヤ全体の諸々の肢が皆全様全形式になる可きであると考ふる宗派心は非常なる誤である。現今のキリスト教各宗派は皆他宗が自宗の如きものとなる事を要求して止まない。各宗が獨立の存在者なるが如く考ふることすら既に誤である。而も是等を皆全一のものたらしめんとするが如きは是れ恰も手が目や口をも手の如きものたらん事を要求するに等しき誤りである。又キリスト教會の一宗が他宗を異端視し來れる歴史は全じく此の宗派的誤謬の上に築かれたのである。イエス、キリストに在るものは皆互に當然に一體である。故に些細なる教義の差や儀式の相違等より互に相敵視するが如きは、是れ恰も足が手に向ひ、「汝は足にあらざるが故に我が敵なり」と云ふが如き有様である。キリストの教會が、若しかくして足を切り手を斷つならば自滅の外に無いであろう。

教會の各員についても全様の異理を見る事が出來る。即ち各員は皆キリストの體の肢であり、互に相輔け相補つて行くべきであり、多くの肢が一つの體を實現すべきである。「賜物は殊なれども御靈は全じ、務は異なれども主は全じ、活動は異なれども凡ての人のうちに凡ての活動を爲したまふ神は同じ」(コリント前書十二の四―六)。斯くして美はしき神のエクレシヤが五色絢爛の美を以て織りなさるるのである。

要するに教會の第二の重大なる要件は、キリストと一體をなして居る事實であつて、形式的人造の會の會員となる事でも無く、又人間の行ふ儀式典禮に列する事でも無い。キリストとの交りがある處に教會があり、それが無い處にエクレシヤは存在しない。たとい立派な會堂や儀式が有つてもそれらは何物をも意味しないのである。

ジヨン・カルビン小傳 (一)

カルビンの名は佛語の發音によればヤン・カルヴアン(又はコーヴアン或はシヨーヴアンとも云ふ)となり、又英語の發音はカルヴインであるけれども、普通の慣例に從つて暫くカルビンと記す事にする。

一、ルーテルとカルビン

十六世紀始めの宗教改革は、歐州の天地を一變し、久しく羅馬の政教混合の勢力に壓迫され來りし中世紀の暗黑時代に一大光明を投じ、以て近世の歐洲歴史、從て世界歴史を導き出すの原動力となつた。而して此の宗教改革の二大中心人物は勿論ルーテルとカルビンである。ルーテル以前にもフツスやウヰクリフの如き改革者があつたけれども、何れも其の目的を達する事が出來ずして迫害の中に死んでしまつた。ルーテルと全時にもツヰングリは瑞西東部に宗教改革を實行したけれども不幸にして其業終らずして戰沒し、遂に宗教改革の大事業に對しては極めて小なる寄與を爲したに止まつた。夫故に其の人物より言ふも、其の信仰より云ふも、又其影響より云ふもルーテルとカルビンとは他の多くの宗教改革者中に於て一頭地を拔いて居るのである。夫故に彼等につきて學ぶ事は即ち宗教改革に就て學ぶ事であり、又宗教改革に就て學ぶ事は福音の眞髓について學ぶ事となるのである。茲にカルビンの一生につき若干の觀察を下す事は決して無益な事では無い。主基督の榮光を知らんが爲めに彼の用ゐ給へる有能なる器について學ぶ事は間接に主に對する我等の信仰を強からしむる所以である。

宗教改革者としてはルーテルは勿論カルビンに先立つて居る。カルビンは其信仰の上に於て直接間接にルーテルの影響を受けて居つた事は確かである。乍併事業の大小、功績の多少及影響の範圍より見る時はカルビンは決てルーテルの下に立つて居ない。否今日の世界的勢力の上より見る時は寧ろルーテルの上に立つて居るとも云ふ事が出來る。即ち時代に於てルーテルに後れ、信仰に於てルーテルの影響の下に在つたとは云へ、宗教改革

の働きの大小より見て此の二人は共に神の選び給へる最大なる器であつた事を認めざるを得ない。

ルーテルの影響の下にある諸國は、獨逸、丁抹、スカンヂナビヤ諸國及墺太利等である。而してカルビンのゼネバに於ける宗教改革はスコットランド、オランダ、ハンガリーに廣まり、遂には英國々教會にも其の影響を與へ、從て北米合衆國、加奈陀其他の英領殖民地に其の感化を與へて居るのである。即ちカルビン主義の影響を受けたる諸國は主としてアングロサクソン民族であり、全民族が現在に於て世界的勢力であるが爲めに、カルビン主義の影響が最も多きを示して居るのである。勿論アングロサクソン系統の信仰は數多の小派に分裂して居り、之を一概にカルビン主義と稱するは不精確である事勿論であるけれども、大体論としてはスコットランドのジョン、ノックスも英國のクロムエルも、又北米合衆國の創設者ビルグリム、ファザースも皆カルビン主義の代表者である事より考へて、是等の諸國及其の殖民地がカルビン主義の國々であると云つても非常なる過ではない事と思ふ。而して以上の諸國が現在に於ける世界强國の大部分をなして居る事より見て、此の二人の影響の大なる事を知る事が出來る。

此の二人は信仰の方面より見て大体に全一であつた。ハルナックは其教會史に「カルビンは其の改革的活動の特種の方面により、宗教改革史上に特異獨立の地位を有して居り、且つ其の活動の範圍は頗る廣汎に亘つて居る。乍併其の教義の根本的傾向に於ては彼は第二期生であり、ブーセルと共にルーテルの裔でありルーテル派である。……」と云つて居る。勿論神の至上權、預定の教義等はカルビンに於てルーテルよりも强く之を主張し、又聖餐の意義に於てルーテルと異つて居つたけれども、彼等は共に聖書の上に立ち、信仰によりて義とせらるゝ事を其の教義の中心とした点に於ては、彼等は全一の立場に立つて居つたのである。

此の二人をして異らしめしものは其の性格と、之より生ずる實際の活動の色彩であつた。ルーテルの磊落なのに對してカルビンは謹嚴であつた。

彼の直覺的斷片的なるに對して是は思索的系統的であつた。ルーテルの怒るや大風一過の觀があり、カルビンの戰ふや秋霜烈日の趣があつた。ルーテルの遺著の中外觀的矛盾の數多存するに比し、カルビンの場合に於ては多くは論理一貫矛盾の痕跡をも認むるを得なかつた。而して其推理力は透徹して居り、彼の論理は「燃ゆる論理」なりと稱された。此の差がルーテルの神學に比してカルビンの神學が系統的組織的に組み立てられ、各國に波及するの力となつた所以である。且つルーテルの直感は其聖書の飜譯をして比類なき傑作たらしめ、カルビンの綿密なる性質は其の聖書の註解をして今日に至る迄他の追從を許さゞるものたらしめて居る。一方ルーテルの豪放にして氣、宇内を呑むが如き性質の裏面に嬰兒の如き愛すべき性質を有すると仝じく、一見神經鋭敏にして怯懦なるが如きカルビンも一度び神意なりと信じて立つ時、世界を敵として尚懼れざるの力を藏して居つた。極めて人情の厚かりしルーテルは往々にして多年の友を敵として之を捨て、一見冷淡なるが如きカルビンにも多くの温情掬すべき個人的逸話を殘して居る。ルーテルが數十の讃美歌を作れるに對してカルビンは唯一回作歌を試みて而も成功せざりしが如きも、兩人の性格の相異を示して居る。

而して此の性質傾向の差異が其の宗教改革に及ぼしたる影響は、自ら非常に異つて居る。ルーテルは信仰による自由を高調した。而して教會の道德的訓錄の爲めには特別の方法を用ゐず、之を福音主義の立場に在る諸候に任せた。信仰と愛さへあるならば善行は自然に是より出て來るのであると考へて格別の手段を取らなかつた。夫故にルーテル派の教會は常に此の信仰に在るの自由を高調し、此の自由を以て教會の道德的規律たらしめんとしたのである。從てルーテルの影響の下に在る獨逸に於ては、今日に至るまで此の根本觀念を維持する事に勉めて居るの結果、信仰の問題は常に根本的に考へられ、實行問題と離れ妥協を排して眞理に向つて突進するの傾向を有して居る。故に一方基督教の眞理に向つて根本的の反對を示すが如き學說も獨逸に起つたと共に又最も深く基督教

の眞理を理解せる人々も多く獨逸に起つて居る。彼等は正直に、自由に自己の確信を述べたる点が、其の共通なる点であつて、此の点がルーテルの影響の下に在る獨逸系統の基督教の一特徴である。

乍併其の教會の道德的訓錬に至つては甚だ不充分であつた。此の道德的訓錬を掌るの任務に在る諸候は、必ずしも此の方面に熱心では無かつた。而して教會は唯信仰による義を高調した結果ルーテル死後に獨逸の教會に道德的頽廢が起つて來る樣になつたのである。而して之に反抗する運動が起つて此の傾向は阻止せられたにしても、少くとも是が教會の訓錬に關するルーテルの態度の影響と見る可き事は疑を容れない。

一方カルビンは教會の訓錬に就ては徹底的の方法を用ゐた。彼は行爲によつて義とせられるにあらざる事を知つて居つた。乍併神の御旨に叶ふ行爲を爲す事は彼を榮むる所以であり、從つて如何なる方法を用ゐ、如何なる代償を拂ふても此の道德的訓錬を嚴格に實行する事を必要と信じた。是れが後述する如き基督教的社會を造り出し、道德的訓錬、基督主義の實行が日常の些事に至るまで徹底し、今日の英米人の社會的家庭的敬虔、清潔其の他の諸德を生み出した所以である。

乍併其の弊害も無くは無かつた。即ち信仰による自由は幾分犧牲にせられ、之に代りて律法主義が起つて來、其の結果僞善が多く生じて來たと云ふ点である。ハルナックは是について曰く「カルビンはルーテル及メランヒトンより受繼げる神學の基礎の上に、更に聖書主義、律法主義及聖潔の過重を醸成し之がためにルーテルの思想のみならず、ルーテルによりて明かにせられし宗教的自由を危からしめたるは、之を見逃してはならない」と云つて居る。而して此の言は或程度迄眞理であつて今日英米人の中に存する多くの僞善は、カルビンの取りし態度の惡しき影響であると認むる事が出來る。

斯く比較し來る時、たとひ宗教改革家としてルーテルに比し後輩であつたにしても、尙カルビンの生涯及事業につき、學ぶ事の徒勞にあらざるを思ふのである。（つゞく）

山上の垂訓の研究（一）

一、心の貧しき者

一、イエス群衆を見て、山にのぼり坐し給へば、弟子たち御許にきたる。

多くの群衆がガリラヤ、デカポリス其他の地方より彼の許に押寄せて來た（マタイ傳四の二五）。是れ彼の十字架を負はんが爲では無く、主として彼等の病を醫されんがためであつた。病の醫されんことを願ふ事は人の情である。必ずしも罪では無い。乍併イエスの與へんと欲し給ひしものは、御國の福音であつて身体の健康ではなかつた。今日も宗教が神癒、加持祈禱に墮落する時之に集まる者如何に多きかを見よ。イエスはかゝる者を見ては之を避け給ふのが常であつた。而して彼は「山にのぼり」給ふた。

此の山が何山であつたかは明かでは無い、ガリラヤ湖の北岸カペナウムに近く高低の丘陵起伏して居る。恐らく其中の一つであつたらう。傳說によれば之がヘルモン山であつたとも云ひ、又ハッチン山であつたとも云ふ。後者はチベリアスの西にある高山である。イエス群衆を避けて山にのぼり給ひし時、弟子たち御許に來つて敎を乞はんとした。（ルカ傳には此の光景を尙詳しく記して居る（ルカ傳六の十二）。之を必ずしも矛盾せる記錄と見るの必要は無い事と思ふ）而して唯弟子のみならず群衆も亦彼等に從つて押し寄せて來たのである（マタイ傳七の二八、八の一、ルカ傳六の十七等）。

二、イエス口をひらき敎へて言ひ給ふ。

ルカ傳六章二十節には「イエス目をあげ弟子たちを見て言ひたまふ」と記されて居る。マタイ傳五章一節と之とを對照して、此の山上の垂訓が主として弟子達に向つて語られたのであつて、群衆は之を間接に聽いて居つたのである事が分る。是が山上の垂訓の內容を示す上に重要なる事實であつて、山上の垂訓は神の國の民によりて行はるべき道德の標準であり、而して彼等によりてのみ實行され得べきものである事を知る事が出來ると同時

に、一方神の國以外にある者の良心を覺醒し、彼等をして自己の罪人たる事を知らしむる力があるのである。實に此の垂訓は兩刃の劍であつて、一方聖徒の目標を示し、他方罪人の罪を示すのである。「口をひらき」(マタイ傳五の二)「目をあげ」(ルカ傳六の二十)は共にイエスの態度の特に嚴肅なりし事を示して居る。重要なる事を語り又は爲さんとする時は、聖書は多く此の種の言ひ表はし方を用ゐて居る(使徒行傳十の三四全二十一の四十等)。

三、幸福なるかな心の貧しき者、天國はその人のものなればなり。

是よりイエスは八つの「幸福なる者」を掲げて居る。口を開いて第一に進り出でし是等の言が、如何にイエスの思想が革命的であり、天的であり、全然人間の思想を超越して居つたかを示して居る。是等を讀みて其の中より湧き出づる神秘的靈力に動かされないものは無い。全体が實に天來の音樂であり而して此の第一句は重々しく其の全曲のテマ(主題)を示して居るが如くに見へる。

「幸福なる哉」は仕合せなる哉とか、幸運なる哉と云ふ意味では無い、「神に祝福せられたる者なるかな」との意味である。即ち、神の最も喜び給ふ者、惠み給ふ者、神の恩寵の下に立つ者、神の特に祝し給ふ者との意味である。基督者には他人の知らざる幸福がある。是れ幸運によつて富貴權勢を獲得した事では無い、又家内安全無事息災でも無い。神に祝福せらるゝ事である。神に呪はれて他の凡ての幸福は皆禍の最大なるものとなるのである。

「心の貧しき者」。ルカ傳には單に「貧しき者」と記して居り(ルカ傳六の二一)。多くの註解者の一致せる点は、イエスは多分ルカ傳の如くに述べられしものを、マタイが其の言葉通りを傳ふる代りに其の意義を吸んで之を敷衍したものであろうと云ふ事である。恐らくイエスはルカ傳の記事の如く「幸福なるかな貧しき者よ」と云ひ給ふた事であろう。而して弟子たちの中及群衆の中には多くの貧しき者が居つたのであろうと想像する事が出來る。彼等は自己の生活難につき日々心を勞して居

り、何とかして此の生活難より脱出したきものと考へて居つたであろう。生活難さへ無くば自己は幸福であると考へ、又彼等はかくつぶやきつゝあつたであろう。彼等をして不幸ならしむるものは其の貧であつた。然るにイエス云ひ給ふ「幸福なるかな貧しきものよ」と。之を聽いた人々のおどろきは如何ばかりであつたかを明かに想像する事が出來る。

實際イエスの目より見て不幸なる者は富める者であり幸福なる者は貧しき者であつた。單に不義を行つて富める者が不幸であると云ふのでは無くたとひ正しきを行つて富んだにしても尙ほ富める者は不幸であると云ふのである。仝樣に正義の上に立ちて、貧しき者が幸福であると云ふのではなく、たとひ不義の結果であつても貧しきものは幸福であると云ふのである。如何にして然るか。

原語「Ptochos」プトーコスは貧しき者又は乞食の意味に用ゐらるゝ語であり、甚だしき貧即ち無一物を示して居る。何故かゝる者は幸福であるか。蓋し人間の最大の弱点は見えざる神に賴る事をせずして、見ゆる物に賴る事である。殊に我等は地に財寶を積みて富み居る場合に於ては、如何に精神修養に努力しても如何に物質を超越せんと勉めても、心は自然其の財寶に繫がるに至る事は自然の數である。「靈魂よ多年を過すに足る多くの善き物を財へたれば安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ」（ルカ傳十二の十九）と云ふ者は唯此の富める人のみでは無い。「往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ」（マタイ傳十九の廿一）と命せられて「悲しみつゝ去らない」者は幾人かある。實際富める者は不知不識の間に神よりも財を重んじ、神に仕ふると考へつつも尙マンモンに仕へ、神に賴れる事と信じつゝ財に賴つて居るのである。人生の最大の不幸は神より離れる事である。而して富が人を神より離すの力であるならば「禍害なるかな富む者よ」と宣ひしイエスの御心を解する事が出來る。

然るに「貧しき者は依り賴むべき何物をも地上に持つて居ない者である。故に彼は眞に依り賴むべき神を求むるに最も良き地位に置かれて居るの

である。若し幸福とは最善のものを所有する事又は所有し易き地位にある事であるならば、神に依り頼み、天國を已のものとするの最善なる地位に置かれたる貧者は幸福である。故に貧者よ悲しむを止めよ。喜び悦べキリストの目より見て彼等は最も祝福せられし無上の幸福者である。神の祝福し給ふ幸福なる狀態がたとひ人類より見て不幸であつてもかまはない、かゝる事は人類の迷妄より生ずるに過ぎないのである。若し我等まことの信仰の上に立つて居るならば、此のイエスの御言に答へて「然り我等貧者にまさりて幸なる者なし」と答ふる事が出來るであろう。實際天國を已のものとなすが爲めには世に貧者にまさりて善き境遇に置かるるものは無いのである。

此の意味に於て我等貧しき者の幸福なる所以を明かにする事が出來る。乍併事實に於ては貧者にして此の特に惠まれし境遇を知らず、之より來るべき幸福を享有しない者が澤山にある。かゝる者は物に貧しいとは雖も、心に貧しからざる者である。彼等は其の幸福なる境遇を用ゐて神に就て富まん事をせず、唯其の足らざる物を追求して止まない。茲に於て彼等の心に平安なく、慰藉なく、唯無限に物欲を追ふてもがきつゝ遂に永遠の滅亡に至るのである。かゝる貧者は決して幸福では無い。故に貧が眞に其の人の幸福たるがためには、「心に於て」貧しき事を要するのである。

「心の貧しき者」は其の心に何者をも持たざるが如くに感じ、凡てを神より與へられ凡てに於て神に依り頼む者である。其の日常の生活も其の日毎の糧も其財産も、凡て之を主より與へられ、自已のものとしては一物をも所有せざる者である。故に眞に心の貧しき者――心に於て貧しき者――はたとい巨萬の富を所有すと雖も之を以て全然自已のものにあらずとするが故に貧者であり、從て貧者の幸福に與る事が出來る。かゝる者を指して主は幸福なる者と呼び給ふたのである。反之若し些少の財にても人若し之に依り頼む場合に於ては、彼の心は神を求めず、神に依り頼まざるが故に彼は自已に飽滿しつゝある富者である。かゝる者は禍なる哉であつて眞の幸福に入る事が出來ない。

而して茲に「貧」と云ひ「富」と云ふ所以のものは必ずしも物質的又は金錢的の意味のみと見る可きでは無い、或は知識、道德、勢望、權力、體力等凡て我等に附隨する處のものに就て全樣である。若し人あり其の知識に誇つて神の前に自己を卑からしめないならば、イエス、キリストが彼に向つて「なんぢ若し全からんと思はゞ汝の知識を拋棄せよ、さらば天的の知識を得ん、かつ來りて我に從へ」と宣ふ時、彼は悲しみつゝ去るであろう（マタイ傳十九の二一參照）。道德に於ても權力に於ても体力に於ても同樣である。若し我等是等の賜物に富むならば、是等は皆神のものであつて、神が彼に委托し給へるものたる事を知らなければならない。然らずして之を自己のものと思ふ時彼は是等のものに關する富者となつてしまふのである。而して「富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を通るかた却て易し」（マタイ傳十九の二四）なるイエスの御言は單に金錢財寶のみならず、其他の有形無形の凡ての賜物に就て云はれて居るのである。此意味に於て此の世の人々を見る時、貧しき者は實に少數にして殆んど全部がカーネギーの如く、ロスチャイルドの如き富者である事を知るのである。最も困難なる事は眞に心に於て貧しくなる事である。

「天國はその人のものなればなり」（改正譯には「其人のものなり」とあり之れ接續詞 hoti を省譯したのであつて適譯ではない）。心に自己に屬する何物をも所有せざるものは、實は現在に於てのみならず來世に於ては一層完全に天國の所有者となるのである。「何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり」（コリント後書六の十）とはかゝる人を云ふのである。天國に關する此の神の約束を如實に信ずる者に取りては、地上の凡てのものは全く塵埃に等しいのであつて、我等の心は最早や之に捕はるゝことなく、眞の靈の赤貧を味ひつゝ、神の祝福を受けて、感謝讃美の聲を高らかに擧ぐる事が出來るのである。眞に貧しき事即ち心の貧しき事こそ實に基督者としての常態であり、彼は此の狀態に眞の平安と感謝とを見出すのである。

傳道欄

本欄の目的は未だ信仰を得ない人、基督教につき何も知らない人に讀んでいたゞく事であります。尖故に本欄をば之を別冊として印刷して置き、之を「基督教パンフレット第一」と稱します。傳道用に散布したら何時かは實を結ぶ時があるだろうと思ひます。「汝の糧食を水の上に投げよ、多くの日の後汝ふたゝび之を得ん」とあるが如くであります。別冊の方は定價一部三錢、送料十部迄二錢、二十部以上送料不要、五十部以上定價一冊二錢五厘の割です。廣く用ゐられん事を望みます。本社に御注文下さい。

信者と未信者との差異

茲で私は何故に信仰が必要であるか、如何にして信仰に入り得るか、又信仰の内容理論は如何なるものであるか等について述べようとは致しません。唯自分が信仰を得た後と其の以前とが如何樣にちがつて居るかを述べて、未だ信仰に入らない人々の參考に供したいと思ひます。信仰に入る事の結果の如何なるものであるかを知るならば、信仰に入るの必要も分り、從て如何にして信仰に入るかを求める樣になると思ひます。

第一に私はキリストを信ずるに至る迄は、自分の生きて居る目的が分らなかつたのであります。私自身頼みもせぬ間に知らずに生れて居つたのですから、勿論私自身に生れて來る計劃も目的も有つた筈はありません。是は私だけで無く何人も仝じであります。然るに彼是して居る間に次第に生長して來て、遂に人生の目的如何を考へる樣にな

つて來たのであります。我々は全然目的なしに生きて居る事が出來ません。全く目的の無い樣に見ゆる殺那主義、快樂主義の浮浪人の樣な人にすらそれが其人の生存の目的であります。況んや何か一生を意義ある樣に送り度いと考へるならば、どうしても人生の目的について考へなければならず又眞面目なる人は誰しも考へさせられるのであります。

併し乍ら考へれば考へる程其の解決は困難になつて參ります。私には確にそうでありました。何故にある人は一生田の面に立つて泥に塗れて働かなければならないのであろうか。又何故にある人は官吏とか云ふものになつて、一生を送らねばならぬのであろうか。又何故に或人は實業家の樣なものになつて、一生を算盤と首引をしなければならないのであるか。何人も自分の從事して居る仕事が、確かに自分の生れて來た目的である事を充分に確信して居らないのでありまして、多くは自分の家の傳來の業であるとか、又は周圍の事情より押しやられて止むを得ず從事して居るとか、又は教育の種類程度によりて自然に定められるとか又多くは生活のためいや〳〵ながら止むを得ず自分の仕事に從事して居るのであります。

又或は野心家がありまして、巨萬の富を積まうとか、青雲の志を達しようとか、名聲を竹帛に垂れようとか云ふ大きい望を懷いて、之を自分の一生の目的として居る人もあります。併し乍ら昔から佛家の敎へて居る樣に人は一度は必ず死なゝければならず、そして死ぬ時に是等の富や名譽や權勢は皆自分と離れて、自分は墓の中に冷たく押し込まれてしまふのであります。たとへば聾者が音樂會に出て、徒に他の人々が音樂に聽きとれて居るのを見ると同樣に、死んだ人は自分の名聲がたとひ數百年數千年の後に殘つて居つても、墓の中の自分は之に對して全く無關係でありまして、此の事を考へる時自分が果してかゝるものを求めて一生齷齪したのが正しかつたかどうかを、疑はざるを得ざるに至るのであります。

國家や社會の爲めに盡すのを自己の本分とし、此爲めに一生努力する事を人生の目的として、進

んで居る人も中にはあります。是は寔に立派な考へであります。人生の目的はかゝる尊い行爲を爲すにある事は何人も疑ふ事が出來ません。乍併社會と云ひ、國家と云ふも皆人類の集合であります。故に人類全体に亘つた大目的、人類が何を目的にして進み何を理想として行動すべきかが分らない間は、社會及國家を如何にすべきかが分りません。社會や國家の目的も人類の凡てが進むべき目的に從ふ事より外に無いのであつて、此の目的に逆ふ時は社會も國家も存在の意味を失つてしまいます。故に人間の目的が分らない間は國家の目的も分らないのでありまして、單に國家社會の爲めに盡すと云つたところでそれは是迄の習慣に盲從して居るだけの話であり、人生の目的の解決にはならないのであります。

然るに私が信仰に入つてからは此の目的が天日の如くに明かになりました。何故なれば私は私の造主を知つたからであります。(兩親は私の造主ではありません。兩親は男女の性をすら自由に造り得ないのであります。兩親は神の器として神の創造の働に參與しただけであります。)造主を知つて始めて我等が造られし目的が分つたのであります。其の目的は外ではありません。創造主を知りて之を信じ榮める事であります。自分の凡ての仕事職業地位能力は皆此の目的に向つて注がれ、朝夕此の目的の爲めに生きるのであります。隣人のために計るのも、家族のために盡すのも、國家や社會に奉仕するのも皆此の中心の目的より出るのであつて、此の最後の目的が明瞭になつて他の凡ての事が生きて來るのであります。

人生の目的が明かにせられし時のよろこびは、何を以てもたとふる事が出來ません。是迄五里霧中に彷徨して、何處に向つて進むべきかに迷つて居つたのが、急に霧晴れて行先が明かに見えて來たと全じ樣に、私の心は凡ての危懼から免れて希望と歡喜とに滿たされ、私の足踏は勇ましく、たとひ其の途は嶮岨であるにしても、尙確信ある歩調を以て進む事が出來たのであります。此の喜びは信仰に入つて後に始めて私は經驗したのであります。

第二に私は死や病や其他の不幸に打勝つ事が出來る樣になりました。以前は死ほど恐ろしいものは無かつたのであります。それは戰場に出て英雄的の死が出來ないと云ふ樣な卑法な意味の恐怖ではなく、死そのものは何を意味するか、死後は如何になり行くか、是等の事が不明であるが爲めに死は實に恐ろしいものでありました。其他疾病不幸災難等についても、忍耐して之を通過せしむる事は出來たかも知れませんが、是等のものに打ち勝ちて歡喜の叫びを擧げる事は出來ません。是等のものは多くの人々を仝じく、恐るべきもの忌むべきものでありました。そして是等のものは何時自分を襲ひ來るか分らなかつたがために、常に不安の中に生きて居つたのであります。

然るに私が信仰に入つてから死後の生命について明瞭な確信を得る樣になり、其の後は死に對する恐怖は全く消滅してしまひ、死は無いと同じ事になつてしまひました。誠にまことに汝らに告ぐわが言をきゝて我を遣し給ひし者を信ずる者は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり」(ヨハネ傳五の二四)との御言の通りであります。私は未だ生きて居りますが、死と云ふ事を全然恐怖無しに考へ得るのみならず、寧ろパウロの如く時には「子の願は世を去りてキリストと偕に居らん事なり」(ピリピ書一の二三)と思ふ事すらあります。勿論實際の死が私に面して來た時に、私に臆病心が起つて來て不信仰の態度に陷る事無しとは保証が出來ません。私自身決してかゝるエライ人間と思つては居りません。唯最も正直に言ひ得る事は、現在に於ては死について何等の思ひ勞ひが無いと云ふ事であります。

死について既にそうであります。其他の事は勿論之に伴つて來るのであります。即ち病の中にも慰めあり、迫害の中にも喜びあり、「四方より患難をうくれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず、責められども棄てられず、倒されども亡びず」(コリント後書四の八、九)凡ての不幸と困難との中にも神の愛に浴し、キリストの恩惠を味ひつゝ、感謝と讃美に心滿されて進み行く事が出來るのであります。此の大なる變化も亦私が信仰

を得て後に始めて之を經驗したのであります。

第三に私は人を愛する事の如何に貴く、反之自己を愛し此世の慾を愛する事の如何に惡しく、又つまらない事であるかを知る事が出來る樣になりました。私がキリストの愛を見、殊に其の十字架の上に我等の罪を負ふて死に給へるのを見るまでは、凡て自己を中心となし、自分を愛して生きて居りました。又此の世の富、力、名譽等を求める心が强かつたのであります。思はぬ僞を言ふのも自己の安全を謀るためであり、人の失敗を見てよろこぶのも自分の權力を得んが爲めでありました。毎日の自分の努力は如何にして此の世に於て成功し、安樂を得、金を蓄へ、よき家庭を作り、人より重んぜられんかにありました。たとひ立派に見える行爲を爲す事がありましても、矢張りそれが最も多く自分の心を滿足せしめ、人に褒められんが爲の自己中心の心から出て居つたのであつて、一にも自己二にも自己、唯自己の爲めに生き自己を愛し此の世の慾を求めて生きて居つたのであります。

然るに信仰を與へられてからは、此の世の富や權勢や名譽を愛する事の如何につまらないものであるかを知りました。又自己の生命を全ふせんとするものは之を失ひ、その生命を失ふものは之を得る事も知りました。パウロは「曩に我が益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり。然り我はわが主キリスト、イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが之を塵芥のごとく思ふ」（ピリピ書三の七、八）と云つて居ります。私が此の狀態に達したと云ふのではありません。自分の力は弱く、此の世の誘が强く我に臨みます。乍併私が斷言してやましくない事は、是等のものが常態として私を誘ふ力が無くなつたと云ふ事であります。私の求むる處のものは神の國と其の義とであります。「何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩はない」事が私の主義となりました。「先づ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」（マタイ傳六の三三）とのイエスの敎が、力强く私を導くに至つたのであり

ます。

そして私は此の世に於て最も貴いものは、隣人を愛する愛である事を知りました。己を犠牲にして他人を愛する事が本當の生命であります。此の愛を實行して生きて居る處に神が常に宿り給ふのであります。自己については何物をも求めず、唯隣人を愛してそのために自己の苦しみを忘れ、自己を十字架につけるの生活は、私が信仰に入りてより後に始めて之を知つたのであります。そして之を完全に實行し得ない悲しみは何時になつても去りませんけれども、以前に唯自己の慾望のためのみに生きて居つた時に比較して、現在の自己を考へて見る時、自己を凡て神の御手にゆだねて他を愛する事の生活の如何なるものかを示されて、大なる感激に溢れて居る次第であります。そして祈りとキリストの愛によりて力付けらるゝ事により、次第に此の愛の生活を完成して行く事が、私の日々の生活になつて來ることを感ずるのであります。

以上が私のうけた變化の最も重なるものであります。即ち全然無目的な、又は不明瞭な目的を持ちつゝ生きて居つた自分が、非常に明かな目的を示された事、そして未來の生命に對する確信を得て、死と現在の苦難とに打ち勝つ事が出來る樣になつた事、そして心の中に愛が湧いて來て之に從つて生きて行く樣になつた事、此の凡ては人生の目的、進路及び動機の根本的の變化でありまして是より大なる變化を考へる事が出來ません。而して此の大なる變化を自分に與へたのは、イエス、キリストでありまして、彼は恩惠により我が衷に信仰の心を起し、而してそれに伴つて凡ての是等の祝福を與へ給ふたのであります。

人生は五十、七十は古來稀であります。長い樣で短いものであります。此間を胡麻化して送ろうとすれば送れない事はありません。併し乍ら眞面目な人に取つて胡麻化す事は何ものにも勝りて、大なる苦痛であります。故に我等は唯信仰によりて此の生活を一變し、上より降る諸々の祝福を得て、永遠の幸福に與かるより外に取るべき途はないのであります。（終）

書齋信り

○創刊號を祝福して思つたよりも書き度い事の多いのにおどろきました。聖言を糧として貪ふものは飢ふる事無き事を覺つて安心致しました。

○成る可く變化を多くしようと思つて諸種の問題を撰んだ爲めに一回で終らないものが譯山に出來ました。是等は彼を迷ふてつゞけて行かうと思ひます。「教會論」、「カルビン小傳」の知りは是であります。「山上の垂訓の研究」は聖書の註解であります。併しどれも毎回夫れだけで例等の内容を持つたものにする樣に努力します。そして益も力を入れる点は信仰の種にもしようとする点であります。

○讀者諸君よりの遠慮なき御批評を望みます。殊に悪評を歓迎します。眞面目に欠点を示して下さる方に對し感謝する事を忘れないつもりで居ります。そして本誌がだん／＼發達し改良されて神の御用に立つ樣なものに育て上げ度いと思ひます。

○傳道欄をば出來るだけ通俗なものにし誰にも分る樣なものにし度いと思つて居ます。そして其分だけを別冊にしてパンフレットとして傳道用につかつて貰ひ度いと思つて居るのです。日本全國はやつと福音に觸え始いて居ります。福音の種子を人々の心に蒔きつけて置く來は凡ての基督者の務さなければならない義務であります。此のパンフレットが其爲めに用ゐられん事を願つて居ります。

○傳道欄は成る可く毎号に掲げようと思ひますが聖書の部合でどうなるか分りません。

○讀者の質疑應答欄の樣なものも設き度いと思ひますが、僅か三十二頁の雜誌に果して是が適するや否やを知りません。目下思案中であります。矢張り心の中に湧て來る多くの疑問は、神と聖言とによりて自ら解決せらるゝでありましてかくして解決されたものが本當に自分に取つても解決となるのであります。

○字併本誌に出すと否とに關らず、讀者よりの眞面目なる質問は之を歓迎します。小生の力の範圍内に於て出來るだけ御答へしたいと思ひます。唯あまりに重要で無いと思はるゝ御質問には御答へしない事もあると思ひます。

○日本の基督者はもつと神様に對して、奉仕する者はキリストより凡てのものを與へられて居り乍ら、自分は少しのものも神の御榮のために献げんとは致しません。日本の教會が自主獨立の教會になり遂れて、何時迄も不愉快な忍んで無理解な外國宣教師の制縛を受けて居るのは、一は日本の牧師が自ら自己の主張を以て立つ勇氣のない一種の無氣力者であるから、でもありませうが、又信者が自己の事を思ふ事キリストの事を思ふより多いからであると思ひます。自己の事を命をもすて給ひしキリストに對して、些少の金錢すら出し渋れて居る事は信者の誠甲斐無き事を示して居ると思ひます。私が教會に對する思想及び態度は、本誌の「教會論」に論じ盡すつもりで居ります。

社告

「永遠の生命」定價（送料共）

一部　〇、二〇
半年分　一、一〇〇
一年分　二、二〇〇
海外一年分　三、〇〇〇

○凡て前金の事

○振替貯金口座（東京五八六五二）

永遠の生命社宛拂込の事

大正十五年二月廿五日印刷納本
大正十五年三月一日發行

編輯發行兼印刷人　山形縣鶴岡市八日町乙三五　黒崎幸吉

發行所　山形縣鶴岡市八日町　永遠の生命社

發賣所　東京市九段坂　向山堂書房　振替東京六二七三二

永遠の生命第一号　大正十五年二月廿三日第三種郵便物認可　大正十五年三月一日發行（毎月一日發行）

黒崎幸吉著譯書紹介

ルーテル　加拉太書註解

四六版四百餘頁
定價貳圓
送料十二錢

附　羅馬書序文

ガラテヤ書は基督教の「嘆異鈔」とも云ふべき書で、ルーテル特愛の書であつた。彼は之を「我が愛妻」と呼んで居つたのである。故に此註解は實に學者の知らなかつた、權威ある者の知き態度を以て記されて居る。「信仰」とか又は「信仰によりて義とせらるる」等の基督教の中心問題について本書程明かに、且つ偉大なる力を以て書かれし書を予は未だ嘗て讀んだ事がない。是れ予が之を譯出せる所以である。自己の信仰の不明瞭なる事を物足らず思はゝる人は、本書によつて大に得る處ある事を予は確信して居る。

聖書の讀み方

四六版八十頁
定價三十錢
送料四錢

聖書は一見讀み難い樣で決して絶對に讀み難い書では無い。解し難く感ずる理由は、聖書の實庫に達する道筋を知らない事と之を開く鍵を所有して居ない事とに在る。本書は此の道筋を示し此の鍵を與へんとするが爲めに書かれたのである。此の無盡の實庫に達せんが爲には、之を探る者の熱心が最も必要である事は勿論であるけれども、その熱心に加ふるに此の道しるべと鍵とを持つて居る事は、多くの助となる事であらう。

東京京橋區尾張町
振替東京五五三番　警醒社書店

パレスチナの面影

四六版三百餘頁
挿畫寫眞版六十四箇
定價貳圓七拾錢
書留送料十八錢

著者のパレスチナ及エゴプト旅行の紀行文である。主イエス、キリストの目に觸れ、足跡を印せる聖地に於て予が如何に深く感銘に打たれたかの偽らざる記録である。聖書の引照を多くして讀者の聖書研究の助けとならん事を期し、又挿畫を多くして聖地の印象を目を通して與へん事に努力して居る。且つ最近の猶太人殖民運動の狀態等も記され、又パレスチナの政治經濟上の狀態等も目に映ずるがまゝに記してある。聖書の背景を知らんが爲の參考になるであろう。

東京市麹町區九段坂
振替東京六二七三三　向山堂書房

ベーシル・マシユース著

人種の衝突

四六版二百八頁
定價壹圓七拾錢
送料八錢

英國では目下人種問題が至る處で盛に論議せられ著書も澤山に現はれて居る。其の中で本書は最も簡明に而も要領よく、此問題を論じて居る。目下英米に於て最も多く讀まれて居る書の一である。日本人は未だ此の問題の緊要なる充分に理解して居ない。本書が日本人に此の問題に關し幾分の貢献を與へ得るならば、譯出した目的は達せられたのである。政治家、實業家、教育家の一讀を勧む。

東京神田區表猿樂町十
振替東京三九五八七番　開拓社